

# 平成十八年度第十六回全国読書作文コンクール

## 小学生の部 大賞

夜空を見てみよう

永崎 允稔

僕は四年生の夏休みに、火薬を使ったロケットをつくって飛ばしたことがある。青空に向かって一直線に飛んでいき、三十センチほどのロケットが上空でビー玉くらいにしか見えなかった。ノーズコーン（先端の部分）からパラシュートが開き、その後ふわふわとゆっくり降りてきた。谷にロケットが落ちたり、パラシュートが開かず地面にささったりした人もいた。が、僕のロケットはうまく着地できたので、思わず「よし。」と叫んでいた。僕はその時のことを思い出して、この本に迷うことなく決めた。

僕が作ったロケットは、市販の物ではなく紙で作ったので、点火時に燃えないように塗料をぬった。その塗料は銀色で出来上がった時には本物のロケットのように光っていた。尾翼は三枚なので、それぞれの尾翼の角度を整えることが一番大変だった。微妙な角度の違いで全く方向が変わってくるので何度もやり直したからだ。このロケットは百五十メー

トル飛んだ。打ち上げる時は、爆音とともに飛んだ。もちろんランチャ（発射台）を使い、秒読みをした。「3、2、1、0、発射。」スイッチを押す時、「ドキドキ」「ワクワク」が一緒になって思わず手がふるえた。ロケットは大空にすい込まれていった。今までの緊張と不安も飛んでいった。

糸川さんたちは、最初ペンシルロケットを水平にセットした。何故水平にセットするのか初めは分からなかったが、本を読み進めるうちに理由がわかった。その時は追尾の技術が発達していなかったため、垂直に打ち上げてしまうとデータがとれなくなってしまうため水平でないといけなかった。糸川さんは、日本で最初にペンシルロケットを開発した人だ。しかし糸川さんはけっして一人で作ったわけではない。火薬、空気抵抗、設計などに詳しい研究者も協力している。

ロケットを初めて考えた人は、ロシアのツイオルコフスキーだ。9才の時に耳が聞こえなくなっていたが、それを逆にバネにして、本から知識を吸収し、今のロケットと同じ構造の物を考えていた。彼の部屋の机の上に、自分で作った補聴器が静かに置かれていた。ここから、宇宙への夢が羽撃いていったのだ。

著者の的川さんは、テレビで人工衛星の太陽電池の部分に三浦折りが使われていると説明していた。三浦折りは、よく地図の折り方に使われていて、スムーズに開き、破れにくい。その話をしている的川さんは、とても楽しそうだった。

昔の人は空を見て、自分の位置や時間を確認していた。だから、空を見る機会が多かったのではないだろうか。でも現代、すばる望遠鏡で、宇宙の果てまで見られると言うが、夜空を見上げることが少なくなったと思う。だから時には星を見て落ち着く時間を持ちたい。だって僕はこの宇宙の一員なのだから。

#### 選考委員の言葉

著書のペンシルロケットから始まった宇宙への夢に触れて、かつて夏休みにこの作者が紙で作ったロケットを飛ばした経験を重ね合わせて書いています。作文の中の『ドキドキ』『ワクワク』が一緒になって思わず手がふるえた。』という表現は自分が感じた素直な気持ちが表れていてすばらしいです。

また、昔は空を見る機会が多かったのに、いまは技術が進み「宇宙の果てまで見られる」というのが、夜空を見上げることが少なくなったと思う。」と現状を対比して捉え、「だから時には星を見て落ち着く時間を持ちたい。」と結び、その理由を「宇宙の一員なのだから。」と表現した点も光ります。単なる日常生活や身の回りの出来事ではなく、実験に重ね合わせたことを冷静な文章で表現したことを評価しました。

#### 取賞者の声

今まで僕は感想文を書く時、あらずじしか書けませんでした。それは、どう書いたらいいのかわからなかったからです。でも今回は迷わず書けました。それは実際にペンシルロケットを飛ばした事があるからです。その体験した事を書いていくうちにど

んどん言葉が浮かび、あっという間に原稿用紙一枚書けました。

先生に作文を提出した時、入賞する期待よりも、期限までに出せてホッとする気持ちの方が強かったので、大賞になったことを聞いた時しばらくかたまってしまいました。そして、気づけば家じゅう走り回っていました。今でも信じられないくらいです。また、このことによって自分の作文・感想文に自信をもつことができるようになりました。本当にいい経験になりました。

今でも僕が作ったペンシルロケットは机の横に宝物として大切に保管しています。

今のロケットは、前より一層輝いて見えました。

## 小学生の部 最優秀賞(小四)

### 宇宙からのメッセージ

畦 ひかり

この本のタイトルを見た時、とても楽しそうな物語だな、と思いました。私だったら、「金曜日が終わらない」と、大はしゃぎしてしまいます。なぜなら、金曜日だと私の習い事がないので、友達と思いつきり遊べるからです。

でも、実際この本を読んでいくうちに毎日が同じ金曜日だと、どんなに退屈で苦しくやり切れない気持ちになるかということがわかってきました。だから、この本の主人公レニーも、翌朝起きても昨日と同じ金曜日。次の日もその次の日も金曜日。

「エーキューにきんようび。」レニー自身が願ったことだけど、同じことばかりで、いい加げんいやになってきたのだと思います。

だいたいレニーの両親は、彼に期待しすぎです。サッカーが特別好きでもなく上手でもないのにサッカー選手になれますか？絵に興味がないのに芸術家になれますか？

これでは、レニーにプレッシャーがかかって当たり前だと思えます。両親が子どもに期待するのは、子どもにとって大きなストレスだと思

ます。私の両親も子どもに期待していると思います。でも、たぶん姉に期待をしているのだと思います。でも、なぜか私にもプレッシャーがあります。それは、両親が姉と私を比べた時です。そんな時、私もレニーと同じようにプレッシャーとストレスに打ちのめされそうになります。レニーは、このようなプレッシャーでお腹の中にストレスがたまって、それがお腹の中で風船のように大きくなり「パン」とばく発し、「宇宙のゲップ」となって口から出てきたのです。宇宙のゲップが原因で、金曜日がおわらなくなってしまったのです。

しかし、「宇宙のゲップ」は、不思議なゲップですね。今まで、自分だけがプレッシャーでストレスがたまっている！と思っていたレニーに変化が起こったのです。毎日、同じ日が続くと、今まで気がつかなかったことに、目がいくようになってきたのです。自分と同じように、他の友だちやお母さんお父さんもストレスでいっぱいだということに気づいたのです。レニーは、考え方や行動を今までと変えていきました。友だちや両親に思いやりを持ちやつしくせつしたのです。するとどうでしょう！レニーが変わると次の朝、金曜日ではなく土曜日の朝に変わっていたのです。

とても不思議なことです。レニーが自分だけの小さな世界から友だち、家族のことを考える大きな世界にはばたいたとたん「宇宙のゲップ」のおまじないが消えたのです。

この本を読み終えて、「宇宙のゲップ」とは「自分だけがストレスで大

変なんじゃないよ。人に思いやりを持ってやさしくせっしてみて。そうすれば、あなたも新しい生き方がきつと見えてくるよ。」という宇宙からのメッセージだと私は思います。

### 選考委員の言葉

作文の中に出てくる主人公のストレスのかたまりである「宇宙のゲップ」という言葉をイメージとして感じ取り、自分に引き寄せて「両親が姉と私を比べた時」にそれを感じると見極めた表現は光ります。そして、結びの「自分だけがストレスで大変なんじゃないよ。人に思いやりを持ってやさしくせっしてみて。そうすれば、あなたも新しい生き方がきつと見えてくるよ。」という気づきもとてもよかったです。

### 受賞者のひごと

「リン・リン」と電話が鳴りました。その電話は、英進館の担任の福永先生からでした。「テストの結果が悪くて先生が電話してきたのかな。」と最初はドキドキしました。でも、電話は読書作文コンクールで最優秀賞になった。という連絡でした。私はとてもビックリしました。うれしかったけどおどろきで胸がいつぱいになりました。

私は、「金曜日がおわらない」という本がおもしろくて、五・六回読みました。何回も読んでいると、自分の本の中の主人公にいつの間にかなっていました。それから、自分の思ったこと、感じたことを感想文に書きました。その感想文が最優秀賞に選ばれて、今はおどろきよりもよるこびで胸がいつぱいです。

## 小学生の部 最優秀賞(小五)

### 坂本先生と四年二組の思い出

菊池 柚紀

「ねえ藤が丘小学校に、くま本から新しい先生がやってきたことを知ってる?」

「うん、知ってる知ってる。坂本先生って言うんだって。」

坂本先生は、わたしたちに、「雨にもまけず」「しゅんぎょう」「春の七草」「枕草子」などたくさん詩を教えてくれた。ただ、詩を覚えるだけではなく、その詩を書いた作者のことや、この詩にはこのような意味があるということなど、とても勉強になる知識を、楽しく教えてくれた。

坂本先生は、詩だけでなく、よく百人一首をやってくれた。今までよりみんなと、もっと親しめるようになってうれしかった。それだけではなく、百人一首をやっているだけで、昔の詩を書いた人の名前や、その詩を知らず知らずのうちに、覚えることが出来た。

アグネス先生は、耳の聞こえないポツコのために、みんなに手話を教えていた。この場面を読んだ時、わたしも、坂本先生の事を、思い出して、なつかしくなった。それがなぜ坂本先生かというと、一番好きな先生だったからだ。

ある日、国語の授業で漢字をやった。でも坂本先生は、今までにしたことのないような漢字の練習の仕方を、わたしたちに、教えてくれた。それは、指書きという練習の仕方だった。坂本先生は、

「指は第二の脳、指書きは、一番覚えやすいから。」

と、わたしたちに説明してくれた。私は一しゅん意味が分からなかった。でもこの時初めて物知りな変わった先生だな、と思った。きっとアラスカの子どもたちもアグネス先生の文字の教え方について、もしかしたら、同じことを考えている子がいたかもしれないと思った。物知りなところは、アグネス先生も坂本先生も似ていると感じた。

アグネス先生は、最後みんなと別れてしまいが、またアラスカにもどって来てくれた。坂本先生も四年最後の日にみんなに、

「先生は今日でこの学校とお別れして、またくま本に帰ることにしました。」

その一言を聞いた時、クラスの女の子たちは、みんな一せいに悲しんだ。けれど、先生は、泣きたいのをこらえて、わたしたちに最高の笑顔を見せてくれた。だからわたしは泣かなかった。わたしたちが泣き顔を見せていたら、笑顔で笑ってくれている意味がないと思ったからだ。最後にあく手をしてこの一年が終わった。

「こんにちはアグネス先生」を読んで、四年二組の思い出は、かけがえのないものであるとあらためて思った。

坂本先生は、くま本で今、どんなことを、クラスのみんなに教えてい

るのだろう。

### 選考委員の言葉

本を読んで主人公のアグネス先生の手話から自分が教わった坂本先生との体験を引っ張り出し、漢字を覚えるとき、まず初めに筆順を見ながら、つくえの上に指で書く「指書き」のことを印象深く思い出しています。その具体的に生き生きとした感じがよかったです。

### 受賞者のひとこと

わたしの大切な坂本先生のことを書いて、賞をとれたことができ、わたしも坂本先生も、もっともつとぎずながふかまつたと思います。

わたしが賞をとれたきっかけは、坂本先生が、「本を読むことは、漢字を覚える・文章が上手に書けるようになる・話し方が上手になる。」と、教えてくれたので、いろいろな本と、出会ってみました。そうやって、この賞をとるきっかけを作ったと思います。

最優秀賞がとれたので、来年は大賞をねらってがんばっていききたいので、そのため本とは、もっと親してみたいです。だから大切な人・大切な物さがしを、これからもしていきたいと思います。

### 小学生の部・最優秀賞(小六)

毎日が休みでいいの？

佐藤 怜奈

「土曜日が早く来ないかな。」

私もレニーのようにそう思っていた。兄が骨折して入院した時も、毎日が休みでうらやましいと思っていた。あの出来事が起こる前は……

その日、友達と待ち合わせをしていた私は急いで自転車を走らせていた。T字路を曲がった時、「ドンッ!」「ガシャーン!」 自転車はねとばされ、私の体は高く投げられたボールのように宙を舞った。何が起こったのか分からない。頭が真っ白だ。しばらくして意識が戻ると、私は地面にたおれていた。ふと前を見ると、自転車のかごに入っていた荷物がちらばっていた。「あ、私は交通事故にあっただ。自分の状況が、ようやく理解出来た。「大変なことになってしまった。どうしよう……。」

一命はとりとめたものの、左足を骨折し、足の付け根まである大きなギブスをつける羽目になってしまった。学校もしばらく休まなければならなかった。私が望んでいた、毎日が休みというチャンスは、こうしてめぐってきたのである。

休日生活初日。好きなマンガをかいいたり、ゲームをしたりして一日を

楽しんだ。二日目。今日はゲーム三昧。三日目、好きなだけ絵をかく。四日目、五日目……。ふと気が付くと食べる・勉強・ゲーム・ねる・食べる・勉強・ゲーム・ねる……。毎日が同じくりかえしであった。次第に、友達に会えないさびしさと学校で勉強をしていないあせりがついつきた。また、自由に動く事のできないのは、想像以上につらかった。毎日苦しくてたまらない。私が望んでいた休みというものはこのようなものだったのか。

人は経験してみないと分からない事がたくさんある。自分が経験したことで初めて人の気持ちが理解でき、思いやりの気持ちが生まれてくるのではないかと思う。レニーも金曜日を何度もくりかえしたことよって、普段は意識していなかった友達や母のことが分かり、優しい心が持てるようになったのではないか。

「おはよう。」友達の声が聞こえた。休日生活六週間。ようやくギブスはずれ、学校に行くことができた。まるで私は初めて学校に行った一年生のように学校が新鮮に感じた。久しぶりの授業。休み時間の友達との会話。全てが楽しく、うれしかった。

何気なく過ごしている毎日も、考え方や意識を変えるだけで、つまらない日にも楽しい日にも変えることができる。きっとレニーもこの事に気付いたから、今までのあらゆるストレスやプレッシャーが消えたのだと思う。

今回のけがを通して、何も無い一日一日がとても幸せだということに

気がついた。これからは当たり前まえの毎日に感謝し、一日一日を大切に過ごしていきたい。

#### 選考委員の言葉

自らの事故による入院生活を「休日生活」と呼ぶその言葉が新鮮でした。自分が望んでいた休日生活と現実との矛盾を語って、経験して初めて分かることがあること、何でも無い一日一日の大切さという結論に導いていく部分がよかったです。

#### 受賞者のひとこと

私の作品が選ばれたと知り、とても驚いています。このコンクールに初めて応募したのは昨年のことです。その時は全国で入賞という結果でしたが、普段から文章を書くのが好きな私は、小学生最後の記念にもう一度チャレンジしてみようと思っていました。それに、六月に交通事故にあい、学んだ経験を素直に文章にして伝えたいという思いがありました。そんな時に会ったのがこの本でした。私にとって本は、ファンタジーな世界に連れていってくれるとてもすてきなものであり、そしてまた、いろいろな事を教えてくれる先生のような存在です。これからもいろいろな本を読み、自分の視野を広げて行きたいと思います。今回この賞を頂いて本当につれしかったです。ありがとうございます。

## 中学生の部大賞

### 戦争について

濱田 駿

みなさんは戦争についてどういう印象を持っているでしょうか。僕が戦争について持っている印象は「悲しい」です。

日本の中学生が戦争について持つ印象は、「悲惨」や「冷酷」といった印象だと思うのです。しかし、戦争を経験したことがないのにそんなこととは言えないと思うのです。もっと厳しく言えば「知ったかぶり」だと思うのです。

主人公のチャーリーの戦争についての印象は「軽視」だと思います。チャーリーと僕は同じ考えで、戦争を軽く思っていました。でも彼は、これから戦争に行くというのにそんな考えでいるのは異常だと思いました。多分彼は戦争というものを全く知らなかったと思います。

初めて戦争を経験してきたチャーリーは、恐怖のあまり戦場から逃げ出したかったに違いありません。僕はなぜ彼が逃げ出さなかったか考えました。彼は戦争が終わり故郷に帰ったあと周りの人から一人前の大人として認められたかったのでしょう。そして大人として認められ、例えば、人から尊敬されるとか人に頼りにされるなど人間関係をうまく築け

る人に彼自身がなれると考えた僕は思いました。

冬、キャンプが始まりました。

チャーリーは傷病兵のために、牛肉を調達してくる任務を言いわたされました。しかし牛肉がないので馬肉を牛肉の代わりにするようになりました。馬の調達が終わり、その馬を殺すことになりました。彼は農場で働いており、馬を殺すことができません。彼にとって馬は家族のような存在なのです。僕は自分で家族のような存在を殺すということは考えられません。彼は苦痛に耐えながら馬を殺したのでしょうか。

何度か戦闘を終えた彼は戦争に対する印象は確実に悪くなっていると思います。

最後の戦闘。

彼は戦闘ごとに恐怖感がだんだんと増していきました。

彼はずっと戦闘ごとに逃げたいと思っていったと思います。ですが彼はそんな気持ちの中、突撃して撃たれました。農場出身ですが兵士として立派に倒れていったと思います。

彼は撃たれたとき傷の具合でも変わるのですが、二つのことは考えていたと思います。戦場で死ぬことと病院などの施設で治療をつけて命拾いすることです。ですが死ぬという方が強く感じていました。僕はこういふとき死ぬという考えは捨て絶対に助かる、生きることができるといふ考えだと思っています。

僕はチャーリーが命拾いするとして考えてみました。僕なら、治療を

うけて死なないうような戦争だけに参加して、戦争が終わればひっそりと暮らすでしょう。チャーリーは大人として認められなかったので、撃たれたことを隠すと思います。反対に堂々と言うかもしれませんが。そのあとは僕と同じようにひっそりと暮らすと思います。

僕はなぜ戦争への印象が「悲しい」なのでしょうか。実は僕の曾祖父は戦争中にソ連に抑留されていました。曾祖父は満州に行かされました。終戦間際ソ連軍が攻めてきて終戦後捕まって連行されました。何百キロメートルという距離を十日間歩かされました。体の弱い人や体力の無い人はおいていかれました。倒れた人を助けようとするソ連軍に撃ち殺されます。曾祖父は友を助けようとして撃ち殺されかけました。着いた場所は強制収容所でした。そこでの生活は体の弱い人は死んでしまうようなものでした。朝は早く起き整列したあとソ連の人達が曾祖父やその他の人達に仕事を与えます。能力にあつた仕事を与えていて車に詳しくあつた曾祖父は、消防車の整備を担当しました。特技や長所を持たない人達は森へ木を切りに行ったりしました。木を切る作業が体力を奪い、ここでも多くの人達が死んでいきました。曾祖母はその間曾祖父の生死も知らず生活していました。終戦から三年後曾祖父は帰ってきました。その話を聞き一番に思ったことが「悲しい」でした。戦争と聞く度に「悲しい」と思い、今では、戦争と聞くと「悲しい」と強く感じ他の感情は薄れていきました。

この本を読み兵士たちの心などが読め、戦争について、主に乱戦のと

き人が撃たれる様子がわかりました。ですが全てではありません。知りたくありません。全てを知ったら恐怖感が心を満たすと思います。そうなれば普通に生活できないと思います。

戦争があればいやでも知ってしまうことになるので、完全に消滅してほしいです。

チャーリーは何もかも知ってしまったので、最後に戦場で受けた心の傷などで亡くなったのだと思います。

#### 選考委員の言葉

戦争がテーマのこの本を読んで、主人公の戦争に対する印象と自分のものを冷静に分析しています。子どもたちが戦争に触れていつも感じる「経験のないわからなさ」を正直に認め、戦争は「悲しい」ものだと感じ取っています。

悲しいと感じる源泉となつたのは、曾祖父のシベリアでの抑留生活に関するリアルな伝え聞きです。倒れた仲間を助けようとして撃ち殺された人、森の伐採という過重な労働に耐えきれず死んでいく人など。この伝聞が触媒となつてこの作者はこの物語に見事に入り込んでいっています。著書にある戦争の悲惨さ・残酷さを自らの聞く体験によって「悲しい」と感じられたことの意味は大きいと思います。

#### 受賞者のひごと

去年、僕はキラリ賞を受賞しました。その内容とは本のストーリーに合わせて僕の気持ちを書いたもので、僕自身の気持ちの部分は少なかったです。そして多少綺麗に

とを並べていました。

当時、僕は書き終えた直後はその感想文で満足していました。ですが受賞結果のあと、先生の話で、

「ストーリーを書くんじゃないなくて自分の感じたことを書くんだ。」

その言葉をもらい、そしてその言葉通り今年ほとんど自分の意見を書いてみました。

少しながら冷たい意見や厳しい意見も入れてみました。あと体験談なども書いてみました。

そうすることで、今年は大賞を受賞することができました。心からうれしく思っています。指導して下さった先生方、そして戦争中の話を教えて下さった親類の方々、本当にありがとうございます。

## 中学生の部 最優秀賞(中一)

### 親子という関係

西村 幸

親が求めていることに、子供は必ず従わなければいけないのだろうか。自分の意見をはっきり言うことのできない子供がいて、そして、その子供の親が子供の意見を聞かず、自分の言う通りに子供を動かしている家庭だとしたら。

また、反対に、子供が親の言うことを聞かず、親が子供に言いたいことを言えず、子供の言いなりになってしまっている家庭だったとしたら。大人が今の子供に求めることと、子供が今の大人に求めていることは、大きく違っていると私は思う。

私は、姉と妹の三人姉妹だけれど、全然似ていない。例え一緒に並んで歩いていても、知らない人から見れば、姉妹だとは分からないに違いない。そして外見だけでなく、性格もバラバラだ。運動能力だって差があるし、テストの成績だって全然違う。

でも、親は私達には、もっとテストで良い点を取れなんて、あまり言わないし、運動があまりできないのなら、自分でできるところまですれば良いと、比較的温和に言ってくれる。ただ、最低限のことだけはきち

んとさせるような家庭だ。

親が子供に無理なことをさせるように言いつける家庭や、子供が親に反発ばかりする家庭のことは、よく分からないけれど、そんな家庭は、親にも子供にも問題があると思う。

例えば、今は、家庭環境や学校生活でストレスが溜まったことから、家族を殺してしまったり、自殺してしまう子供がたくさんいる。そしてその子の親達は、その子が事件を起こしてから、「気づいてやれなくてごめん」などと謝っている。事件が起きてしまったからでは遅いと思う。いつも一緒に居るのに、どうして親は分からなかったのだろうか。

もしかすると、今の時代は、親が子供に信頼されていない家庭が多いのではないだろうか。

子供にとって、親は、不満などを一緒に話すことのできる人物であるはずなのだ。それなのに、全く知らない大人が子供の悩みを聞いてくれる、チャイルドラインのようなところがあるのは、おかしいと思う。会ったこともない大人に、どうして自分の悩みを聞いてもらわなければならぬのだろうか。第一、悩みを聞いてもらっても、私という人物を知らないのだから、ろくなアドバイスはしてくれないだろう。そこで働いている人達だって、自分の事で精一杯で、見知らぬ子供の悩みなんて、本気で聞く気はないだろう。きっと、せっかくだから聞くだけは聞いてあげようという程度なのだろう。

親が子供の悩みを聞いて、一緒に悩んだり、アドバイスしたりすれば、

チャイルドラインのようなところは必要ないのだ。この必要のないものが、この世に存在してしまっていること自体が、今の親が子供に信頼されていないという証になってしまっているのではないだろうか。

初音の親は、初音に無理をさせようとしたのではなく、初音に自分の気持ちを言っただけでよかったのだろう。だから、初音に対して自分達の理想を言ってみたのだろう。

子供の方も、親の事をよく分かっているようで、分かっているのではないだろうか。仕事でつかれて帰ってきた親は、すぐに家の事に取り組み、寝るのは、子供よりもはるかに遅いのに、起きるのは子供より早い。こうして、子供は、親に支えられて大きくなる。子供は親に感謝するべきだろう。しかし、大きくなると、自分一人で大きくなったような顔をする子供が多い。親に今まで支えてもらったのだから、働けるような大人になったら、今度は自分達が親を支えなければいけないのではないだろうか。

私は、親と子供の間に少し距離があり、お互いに相手の事が理解できていない家庭が多いと思う。それは、決して親だけの責任ではなく、子供にも責任がある。親子というのは特別な関係だ。その特別な責任を、親も子も、もつときちんと感じるべきだと思う。

#### 選考委員の言葉

主人公の親子の対立を取り上げ、子どもにとっての親というもののあり方、子ども

の家庭でのあり方、親子関係のあり方について、自分の両親や兄弟などを材料として鋭く分析しています。どうすれば親子関係が良くなるかにまで考えを及ぼしている点もよかったです。

### 受賞者のついで

十月八日、私は、徳島県鳴門市ルネッサンスリゾートナルトの「青風の間」という式典会場で、表彰状を両手に持ち、大賞受賞者や他の学年の最優秀賞受賞者と共に並んで立っていた。

パシャ、パシャと鳴るカメラのシャッター音。会場中に響く拍手の音。信じられなかった。全国読書作文コンクール中学一年生の部最優秀賞を自分が受賞できるなんて。

二カ月前、私は左手にシャープペンシルを持ち、机の上の真っ白な原稿用紙を相手に苦戦していた。一文字書いては消し、書いては消しのくり返しだった。だから私は原稿用紙をしまい、この作文で何を伝えたいのかを一日じっくり考えてみることにした。そうすると、次第に考えがまとまってきた。何とか作文に自分の主張を入れることができた時には、私はとても満足だった。

私が今回の読書作文コンクールで学んだことは、作文というものは、しっかりと自分の主張を持って、その主張を素直に伝えるのだということだ。

### 中学生の部 最優秀賞(中二)

#### 平和を求めて

辻 麻由子

「勝負あり。」私は剣道部に所属している。ある大会で私の中学校は、順調に勝ち進んでいた。部員みんな笑顔で、「次も勝つぞ。」と自信に満ちあふれていた。「もしかして……。」と、あり得ないとは思っていたが、入賞も少し頭の中にあつた。「次は……、聞いたことない中学だからいけるよ。」と、次の試合に臨んだ。すると、予想もしていなかったことが起きた。あっけなく負けてしまったのだ。その日から、「油断大敵」という四字熟語が、私達が試合に出るたびに口にし、耳にするものとなった。ブルランの戦いもそうだ。来るはずの無かった戦いが、突然チャリー目の前にやって来た。油断をしていたチャリーは、何も分からなくなってしまう。とても大きな恐怖に襲われてしまった。油断のせいで、心の準備が出来ていなかった。この時チャリーが一番の敵は「油断。」油断はいつでも私達の敵だと思った。

今日、私はテレビを見た。内容は、亡くなった人の声を聞く、という内容。私は全く知らない人の死を見て、涙を流す芸能人を見た。その人は、きつと優しいんだろうと感じた。

生意気なことを言われ、よく知りもしないネルソンの死に、チャーリーは涙を流した。チャーリーは戦闘で何人も人を殺してきた。人を殺すのが、なんでもなくなっていた。でもチャーリーには、優しい心が残っていた。少し嬉しかった。何人も殺していても、十代の気持ち知らないうちに死んで来たのだらう。人が死ぬということは、悲しいことだということを、チャーリーが忘れていなくて安心した。

学年が変わるごとにクラスが変わり、友達が変わる。そして、話し相手など、もっと新しい友達のことを知りたくなる。それが普通だ。しかし兵士になると、そうでは無くなることを知った。

チャーリーにとっての2度目の戦闘が終わった頃だった。目を見て話すことをしなくなったのだ。どうせすぐ死んでしまうのなら、仲良くしない方がいい。兵士になると、そう思ってしまうのだ。やっぱり、兵士になると少しは冷たい人間になってしまうのかなあ、と考え直した。

私は寝起きが悪い時がある。それで機嫌が悪くなり、そのまま学校へ行くことが時々ある。友達と話しながら登校し、学校に着き違う友達とわいわい騒ぎ、そして部活。汗を流しつつ、ちょっとふざけたりする。そんな学校生活で、朝に機嫌が悪かったことなんて忘れてしまう。

戦争を忘れ、平和な時間など、あるのかと疑っていた私だが、チャーリーにはあった。やはり敵でも共通点があると話はずむものだ。チャーリーはつかの間の平和を感じた。この平和を戦闘をしている兵士みんなに味わってもらいたい。こんな平和があるのなら、北軍、南軍、戦争

をやめて平和に暮らそう、となればよかったのにな、という気持ちになった。

この本を読み終えた時、強く感じたこと。それは、「戦争は人の心に深いきずをつくるんだ。」ということだ。

私はこの春、自然教室で長野の武石村へ行った。ホームステイ先には、七十代のおばあちゃんがいた。農業体験をした後、昼ご飯を食べていたら、軍服を着たおじさんの、白黒写真があった。みんなで見てみると、おばあちゃんが、その人について話してくれた。だんなさんだと言う。ちなみに、弟さんも、戦争で亡くしたそうさ。おばあちゃんの目は、悲しそうだった。

私のひいおじいちゃんは、片方の目が悪かったので、戦場には行かなくてすんだが、それでも恐かったらう。もう一人のひいおじいちゃんは、軍の隊長らしき人物だったらしい。写真はかっこ良いが、笑ってはいなかった。もう、人が悲しむ戦争は二度としないでほしい。

チャーリーは死にそうな時、すべての楽しかったことを思い出している。戦争の映像は流れたのだろうか。仲間が倒れていく姿を思い出したのだろうか。私だったら思い出したくない。そしてみんなに、思い出してほしくない。思い出せないように、戦争が地球からなくなればいい。地球人の全員が、本当に楽しかったことだけを思い出して生きていったら平和になるだらう。

主人公に起きたこと・思ったことなどを自分の体験したいろいろな場面とつなげて思索している様子がうかがえます。「軍服を着たおじさんの白黒写真を見て語る奥さんと見られる老人の悲しそうな目」や「自分の曾祖父の軍の隊長だったときの笑っていない写真」などから、戦争に対する実感に迫ろうとしている点がよかったです。

受賞者のひとこと

私がこの本を選んだ理由は、戦争のことにとっても興味があったからです。読み終わったとき、感想文には何を書けばいいのか分からなくて困りました。この本の場面、戦場を思い浮かべると、戦争の被害にあった人達も同時に浮かんで来た、少しずつ書けるようになり、書き終えた時は、スッキリしました。ども立ちや先生に支えられたからこそ、良い感想文が書けたのだと思います。この賞を受賞したと聞いた時は、とても嬉しかったです。この度はありがとうございました。

中学生の部 最優秀賞(中三)

我らの未来教育

若杉 翔大

ファンタジーかと思ったのに。それが私の最初の感想だった。まさかこれほど教育の過去と未来を熱く語っているものとは思いませんでした。そしてこの本が訴えてくる教育の未来というものも、今までの常識と慣習を無視した思いもよらないものだった。

私は最初、この作者の考える未来の教育というものに注目した。未来には学校にコンビニ、カフェ、金融機関があり、それらを設置している校舎がなんと木造建築。創造するのが大変だったが、それ以前にこんな設備が学校にできた事が理解できなかった。

私は一度、生徒会で「昼休みに体育館で遊べるようにしよう！」という生徒の遊び場を拡大する企画を立ち上げたことがあるが、結局半年もかけて進めたのに、絶対何らかの問題が起きる、全校生徒の利用は難しい、誰がこれらの責任を持つ？というリスクの大きさと廃案にされてしまった。たった遊び場を広げるだけでも百という意見が出て、何通りも問題が発生するというのに、カフェとかコンビニとは……。

ところがよく読んでみると、なんとこれが最高のセキュリティだと

書かれているではないか。

作者はこれらの機関を設置し、地域の人々に利用してもらうことで、学校を公共の場とし、にぎやかな所には変質者、暴漢は現れないという発想を打ち出したのだ。まるで大学である。

さらに未来の教育は義務ではなかったのだ。しかし勉強しないでいい訳ではない。社会で必要な教科はやらなければならないが、他は進学に必要な人だけ、学びたい人だけ受ければよくて、つまり自由なのだ。何か資格をとるために学校に来ないで、ほかの施設で学ぶこともできる。

しかし、この教育方法、考えてみると進学しない人は遊びほうけることだつてできてしまうのではないか。小学校からこの制度だということは、遊び大好き的小学生はみんな勉強しないんじゃないかと思つたが、こんな授業方法、常識のはずれた教育なんか、この現代の日本はやってみないとわからない。

きっと未来の世界の常識という決まりの中では、そんな子供は出てこないようになつてゐるのだろう。常識を外れた考え方に常識は通用しないのと同じように、こんな見たこともない教育に、今現代の教育しか知らない私達がどうしようこの教育方針の結果を予想したとしても、実際、未来のこの教育の世界を体験してみないとそれらは分からないものだと思う。それに、現代教育を一変した未来の教育に、あれこれ私が考えても、それは未来から見てすれば、遅れた考えとして捕らえられると思うのだ。

現代の常識は現代に通じてても未来に通じるとは限らない。ならば未来の

常識というものを理解してみようと私は思った。

未来の常識を理解するには、まずその常識になつた原因を見つけなければならぬ。そこで私は自分でも気にかかる、ゆとり教育がエスカレートしていったことを考えてみた。私はつめこみ教育という落ちこぼれの出やすい教育を変えるためのゆとり教育の方針は良かったかな、と思うが、ゆとりゆとりで授業数を減らし、内容も減らし、それら大事な時間を減らしたにも関わらず、総合的な学習なんていう無駄な時間潰し授業をしていると作者は言っている。

まさに今の私の学校教育を言いあてられているので驚いたのだが、なぜそれを知っているのに国は今ゆとり教育を続けているんだろう？このエスカレートしたゆとり教育は、過去にあった勉強において大切な何かをなくしたかも知れないのに。自習ができる休みが増えたつて、できない人はできないんじゃないだろうか。私の身近な人々から見ても、落ちこぼれ救済ができてゐるとはやっぱり思えない。

未来はそういうところも考えて、自由を尊重した形になつたのだと思う。過去にあった、理想の学校になるための心得や教えは未来になつても取り戻すことはできなかったらしいのだが、まるで本当のゆとり教育の完成型のように、強制的な授業はしない、個性や才能を最大限に引き出す教育がつくり出されたのだ。未来の教育常識の根本はこれではないのかなと私は考えている。

これからの世界は私達が私達なりに作っていく。きっと考え方も変わ

り、作者の言う通り教育も変わるであろう。しかしここまでできて書きにくいのが、作者の作る未来にはなつて欲しくないのだ。作者の世代はあくまで過去であり、過去の人の考えた通りの未来に動いてしまっていたら私達に進歩はなかつたということになる。そんな事は絶対言わせない。過去の人間の考えた未来を上回る未来を切り開く事こそ現代の教育を受けた私達の責任だと思つから。

#### 選考委員の言葉

「現代の常識は現代に通じてても未来に通じるとは限らない。ならば未来の常識というものを理解してみよう」という自分へのテーマに正面から挑んでいる感じがします。過去の人の考えている未来になつて欲しくないという批判がとても面白いし、二年生までは見られなかつた社会に対する自然な気負いがその他の三年生の作品にも感じられて興味深かったです。

#### 受賞者のつとじ

受賞の知らせが届いたのは夜の十一時という時間で、私は塾長からの電話がかかってきた時、心臓がドクンと鳴った。私が塾長からもらう電話といつたら、塾に行くのを忘れていた時と塾の提出物を忘れていた時である。今回もその類かと思ひ。高速で頭を回転させ、塾長が用件を言う前に私の失態を見つけ、怒られる覚悟を固めようとしていた時であつた。「おめでとつ」、この言葉から始まつた会話は、私の最初の緊張していた気持ちを恥ずかしさに変えていくものであつた。

表彰式の時、この本の著者に会つた。これからの未来はあなた達が切り開いていってくださいと言われた。未来は私達の努力にかかっている。いくらくじけることがあつても、自分のやりたい事を見失わなければ、きっと未来は私達の物になるだろう。